

# 暁鐘成のしおり

暁鐘成略譜①あかつきかねなり。江戸期末に活躍した大坂の絵師・戯作者。寛政五年（1793年）-万延元年（1860年）。墓所は北区大淀中の勝樂寺。また、明治四四（1911年）年に木村貞次郎・生田南水建立の暁鐘成翁墓が大阪市浪速区瑞龍寺にある。

## 【short interview】「暁鐘成」ってどんな人？

広く豊かな教養をもとに、幕末大坂で縦横無尽の活躍  
肥田 眩三 氏（元関西大学文学部教授）

幕末の頃の大坂でもっとも精力的に著述や出版活動を行った人が暁鐘成です。彼が著述や絵師として関係した本には、地誌や隨筆をはじめとして、演劇書の類も多くあり、教訓書、実用書から戯作の滑稽本、諷刺本などと、専門的なものから娯楽本まで多彩さです。その読者も大人の男女はもちろん子ども向けまで幅も広く、ほんとうに暁鐘成の活躍ぶりは目を見張るものでした。

もう少し具体的に言うと、暁鐘成が編述した地誌は、『浪華の賑ひ』『天保山名所図会』などを多くあります。ただ、この人が在世中は出版されなかつた本も結構あつて、一番の大著『摂津名所図会大成』は稿本のまま残り、没後久しくしてから『浪速叢書』で出了ました。



『瀬川両岸勝景図会』(文政7-1824年、暁鐘成画)の「難波橋納涼」(個人蔵)。別頁には鐘成の印が入った傘も画かれている。

## 【short interview】「暁鐘成」ってどんな人？

時代を先取りし  
ユーモア溢れる自由人  
北川 央 氏（大阪城天守閣館長）



鐘成の妻おりゆうが  
切り盛りした「豆茶屋」の引札文は、豆  
尽くしの内容(大阪  
城天守閣蔵)。

私が大阪城天守閣の学芸員になつたのは1987年のこと。その翌年、初めて展覧会の主担当となつたのが「上方のちらし・引札展」でした。これが大好評を博したこと、翌年さらに「同展(Ⅱ)」を開催しました。この「上方のちらし・引札展(Ⅱ)」が引札文作家、暁鐘成との出会いでした。江戸時代、平賀源内や曲亭馬琴、式亭三馬、為永春水といった著名な戯作者が引札の文章を書いています。これは今でいうコピーライターの仕事。ところが彼らは江戸の人ばかりで、大坂の人が見当たらない。そこで展覧会の準備にあたり、私は当館にある約800点の引札を調べ、ようやく暁鐘成がいくつもの引札文を書いていることを突き止めたのです。その文章はリズミカルで面白く、洒落つ気もたっぷり。当館の所蔵品ではありませんが、私の一番のお気に入りは「目磨き粉」の引札。人の身体にどこが大切で、どこがそうでないというところはないが、人は毎日歯を磨くのに、目は磨かない。おかしいではないか、と訴える内容で、最後に「鹿廻家真秋」とあります。これが暁鐘成のこと。「鹿廻家」は暁鐘成が営む名物屋でした。

この店はかなり贅沢な造りだため、やがて天保の改革でお咎めを受け、破却の憂き目をみます。それでも、この人はへこたれない。次に天王寺の南平野町で「紅葉ヶ岡美可利家」を開きます。勧進文を回して出資者を募り、その出資者だけが利用できる会員制を採用しました。安芸の宮島から購入した小鹿を放し飼いにし、築山をつくり四季の花木を植え、池をめぐらせて、小亭を設ける。小亭に渡した繩には畚がついていて、客はそれを使って注文したり、料金をやり取りしました。のちのリフトのような設備で、先進的なアイデアですが、何よりすごいのは、出資を募つてそのお金で店を経営するという発想でしょう。彼の企画に賛同する株主を募るシステムで、わが国最初の株式会社といわれる坂本龍馬の亀山社中よりも断然早い。この店は結果的には失敗に終わります。彼は出資者へ詫びるために出家剃髪しますが、名乗つた法号はふざけた「味噌汁坊一膳」。そして彼は難波の瑞龍寺門前で「豆茶屋」を始めるのです。この人の生き方を見てみると、どんな状況に陥つても落ち込むことなく、次々と新たな道を切り開き、笑顔で前に進んでいます。時代を先取りする感性とその行動力に私は大阪人の真髄を見るような気がします。

私が大阪城天守閣の学芸員になつたのは1987年のこと。その翌年、初めて展覧会の主担当となつたのが「上方のちらし・引札展」でした。これが大好評を博したこと、翌年さらに「同展(Ⅱ)」を開催しました。この「上方のちらし・引札展(Ⅱ)」が引札文作家、暁鐘成との出会いでした。江戸時代、平賀源内や曲亭馬琴、式亭三馬、為永春水といった著名な戯作者が引札の文章を書いています。これは今でいうコピーライターの仕事。ところが彼らは江戸の人ばかりで、大坂の人が見当たらない。そこで展覧会の準備にあたり、私は当館にある約800点の引札を調べ、ようやく暁鐘成がいくつもの引札文を書いていることを突き止めたのです。その文章はリズミカルで面白く、洒落つ気もたっぷり。当館の所蔵品ではありませんが、私の一番のお気に入りは「目磨き粉」の引札。人の身体にどこが大切で、どこがそうでないというところはないが、人は毎日歯を磨くのに、目は磨かない。おかしいではないか、と訴える内容で、最後に「鹿廻家真秋」とあります。これが暁鐘成のこと。「鹿廻家」は暁鐘成が営む名物屋でした。

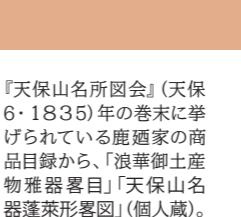
この店はかなり贅沢な造りだため、やがて天保の改革でお咎めを受け、破却の憂き目をみます。それでも、この人はへこたれない。次に天王寺の南平野町で「紅葉ヶ岡美可利家」を開きます。勧進文を回して出資者を募り、その出資者だけが利用できる会員制を採用しました。安芸の宮島から購入した小鹿を放し飼いにし、築山をつくり四季の花木を植え、池をめぐらせて、小亭を設ける。小亭に渡した繩には畚がついていて、客はそれを使って注文したり、料金をやり取りしました。のちのリフトのような設備で、先進的なアイデアですが、何よりすごいのは、出資を募つてそのお金で店を経営するという発想でしょう。彼の企画に賛同する株主を募るシステムで、わが国最初の株式会社といわれる坂本龍馬の亀山社中よりも断然早い。この店は結果的には失敗に終わります。彼は出資者へ詫びるために出家剃髪しますが、名乗つた法号はふざけた「味噌汁坊一膳」。そして彼は難波の瑞龍寺門前で「豆茶屋」を始めるのです。この人の生き方を見てみると、どんな状況に陥つても落ち込むことなく、次々と新たな道を切り開き、笑顔で前に進んでいます。時代を先取りする感性とその行動力に私は大阪人の真髄を見るような気がします。

# 暁鐘成のしおり

暁鐘成略譜②京町堀の醤油醸造業和泉屋に生まれた彼は、若くから狂歌をよくし戯作にふけつたが、商売にも励んだ。心斎橋通博労町に名物屋を営業するもの、その後、心斎橋に関する同人誌「新菜箸本撰」の計画を進め、暁鐘成が心斎橋通博労町に営んだ土産物屋「鹿廻屋」を知りました。これが再びの邂逅です。

## 【short interview】「暁鐘成」ってどんな人？

現代人にこそ理解されるべきマルチな才能  
橋爪 節也 氏（大阪大学総合学術博物館教授・文学研究科教授 兼任）



『天保山名所図会』(天保6-1835年)の巻末に掲げられている鹿廻家の商品目録から、「浪華御土産物雅器墨目」「天保山名器蓬萊形墨図」(個人蔵)。



『天保山名所図会』(天保6-1835年)の巻末に掲げられている鹿廻家の商品目録から、「浪華御土産物雅器墨目」「天保山名器蓬萊形墨図」(個人蔵)。

## 【short interview】「暁鐘成」ってどんな人？

生きていく知恵を持った才人  
しかも色気もある  
明尾 圭造 氏  
(大阪商業大学公共学部 准教授・商業史博物館 主席学芸員)



『瀬川両岸一覽』(文久3-1863年、松川半山画)より「大山崎 天王山 観音寺 寶寺」(大阪市立図書館デジタルアーカイブ)。

かつては、大坂の文化は元禄期が中心で、化政期になると江戸に文化の中心は移つたと言つてきました。ところが実は、この化政期にこそ、大坂では文化の花が開いています。経済的な繁栄から約百年創業の初代から三世代目の頃に文化の百花繚乱期に至つていて、一方で彼は、自分が持つている知識や学問がどうすればお金になるかがわかつていた人で、勘も鋭い。だから、編集や出版の分野でも、その才能を思い切り發揮することができます。近世文人画の領域でも、多くの人が自分の生業を持つています。技術というのではなく、絵を描いているときは画家。でもそれに寄りかからず、いろいろな意味で、現代的な発想力をもつ人であり、大阪の知識人のひとつのあり方を体現したのが暁鐘成でしょう。しかし、あまりにも多彩で少々わかりにくかったかもしれない。単純に文学者とか、絵師とか、経営者とか、ひととくで説明できかないのです。けれども、現代にこそ理解される人。プロデューサーでもあり、暁鐘成のマルチな感覚はこれから時代にこそ評価されるものでしょう。

かつては、大坂の文化は元禄期が中心で、化政期になると江戸に文化の中心は移つたと言つてきました。ところが実は、この化政期にこそ、大坂では文化の花が開いています。経済的な繁栄から約百年創業の初代から三世代目の頃に文化の百花繚乱期に至つていて、一方で彼は、自分が持つている知識や学問がどうすればお金になるかがわかつていた人で、勘も鋭い。だから、編集や出版の分野でも、その才能を思い切り發揮することができます。近世文人画の領域でも、多くの人が自分の生業を持つています。技術というのではなく、絵を描いているときは画家。でもそれに寄りかからず、いろいろな意味で、現代的な発想力をもつ人であり、大阪の知識人のひとつのあり方を体現したのが暁鐘成でしょう。しかし、あまりにも多彩で少々わかりにくかったかもしれない。単純に文学者とか、絵師とか、経営者とか、ひととくで説明できかないのです。けれども、現代にこそ理解される人。プロデューサーでもあり、暁鐘成のマルチな感覚はこれから時代にこそ評価されるものでしょう。

かつては、大坂の文化は元禄期が中心で、化政期になると江戸に文化の中心は移つたと言つてきました。ところが実は、この化政期にこそ、大坂では文化の花が開いています。経済的な繁栄から約百年創業の初代から三世代目の頃に文化の百花繚乱期に至つていて、一方で彼は、自分が持つている知識や学問がどうすればお金になるかがわかつていた人で、勘も鋭い。だから、編集や出版の分野でも、その才能を思い切り發揮することができます。近世文人画の領域でも、多くの人が自分の生業を持つています。技術というのではなく、絵を描いているときは画家。でもそれに寄りかからず、いろいろな意味で、現代的な発想力をもつ人であり、大阪の知識人のひとつのあり方を体現したのが暁鐘成でしょう。しかし、あまりにも多彩で少々わかりにくかったかもしれない。単純に文学者とか、絵師とか、経営者とか、ひととくで説明できかないのです。けれども、現代にこそ理解される人。プロデューサーでもあり、暁鐘成のマルチな感覚はこれから時代にこそ評価されるものでしょう。

## 暁鐘成のしおり

参考文献①  
長友千代治「暁鐘成研究」(大阪府立図書館紀要第6号) 1970年  
船越一郎編著『浪華百事談』第七・八・九・十号  
『日本隨筆大成』第三期2・浪華百事談吉川弘文館 1995年  
『日本名所風俗会』二〇・大阪の巻・角川書店 1980年  
『日本名所風俗会』二一・大阪の巻・角川書店 1980年  
『日本名所風俗会』二二・大阪の巻・角川書店 1980年

## 暁鐘成のしおり

参考文献②  
橋爪節也「天保龜廣告」(新著本撰) 刊行号 2006年  
『近世刊行大坂図集成』(創元社 2015年)には、「浪華名所独案内」  
がバージョン違いで3種掲載されています。これは、大坂の名所や名  
産について載せている地図で、いわば観光案内マップ。3種の地図の  
構成はほぼ同じなのですが、暁鐘成が描いたと/orする図が2種あります。  
これらの地図は、おそらく弘化年間(1844~48年)頃の出版物だ  
ろうと考えられています。版元の石川屋和助の名前があるものとない  
ものがあり、人気の図だったようです。



『小倉百首類題話』(個人蔵)の序文末にはこんな人物像も。

### 【short interview】「暁鐘成」ってどんな人?

煮詰めていけば  
「大阪」の結晶が抽出できる?  
古川 武志 氏 (大阪市史料調査会 調査員)

暁鐘成は、「一時期、心斎橋通博労町北入西側に住んでいて、そこで田畠、味噌、菓子などのほか「浪華御土産」を扱う土産物店「鹿廻家」を営んでいたそうです。つまりは、もともと商売人の血を持つている人。彼の手による大坂の観光ガイドブック「浪華の賑ひ」や観光マップ「浪華名所独案内」を見ても、名所旧跡だけでなく、大坂の有名商店や名物商品などもあれこれ取り上げて紹介しています。しかも、自分の店をさりげなく書き込んでいることもある(笑)。

当時、外から大坂に来た人たちは、観光や土産物を通じて「大坂とはこんなところだ」という何らかの感覚を得ていたはずです。逆に暁鐘成自身も、ある意味で自分なりの「大坂」というものを考えて、それを表現していたのかも知れません。暁鐘成の著した『天保山名所図会』にも、珍品奇品の大坂土産を商つていた鹿廻家の広告を出して、面白く遊んでいるようにも見えますが、同時にそういうことを通して、彼はある種の「大坂像」を体現していたようにも思えるわけです。



鹿廻家は総檜造りで、據宝珠・高欄を巡らせた豪華で人気を博したが、天保の改革に触れて壊された『浪華百事談』挿画より。

『浪華の賑ひ』(安政2~1855年)の「大津湯」の隣に「暁寓居」。

### 【short interview】「暁鐘成」ってどんな人?

名所図会の作者を見る、創作と考証の点と線  
田野 登 氏  
(大阪民俗学研究会代表、「大阪春秋」編集委員)



浜松歌国編『神社仏閣頤重宝記初篇』を改題した『神仏靈験記図会』(文政7~1824年刊、大阪市立図書館デジタルアーカイブ)の目次。同書の序と画は暁鐘成。

◆天保14(1843)年 51歳  
『女操教訓 女大学操鑑』を撰・画  
◆天保15(1844)年 52歳  
『絵本謎尽し』作成  
『絵本顔尽し落嘶』作成  
◆弘化2(1845)年 53歳  
『浪花繁栄見物独案内』(一枚物)を撰・画  
◆弘化3(1846)年 54歳  
『御迎船木偶図会』に略伝を著述  
◆弘化4(1847)年 55歳  
『金毘羅参詣名所図会』六巻六冊編輯  
・この頃までに難波村北ノ町に移住  
◆弘化5(1848)年 56歳  
『鎧日奇觀』五巻五冊撰集  
◆嘉永2(1849)年 57歳  
『二千年袖鑑』統編編集  
◆嘉永3(1850)年 58歳  
『役者早料理』三冊刊  
◆嘉永4(1851)年 59歳  
『淡路國名所図会』五巻五冊の稿本できあがる  
『小豆島名所図会』五巻五冊編輯  
◆嘉永5(1852)年 60歳  
・暁鐘成の号を安部貞昌に譲り、鶴鳴舍晴翁を名る  
◆嘉永6(1853)年 61歳  
『西国三十三所名所図会』八巻十冊編輯  
◆嘉永7(1854)年 62歳  
『古今靈獸譚』六巻六冊を輯録  
『天満宮御神事 御迎船人形図会』を著述  
◆安政2(1855)年 63歳  
『浪華の賑ひ』三編三冊編輯  
この頃、『摂津名所図会大成』十三巻十五冊を制作か  
◆安政3(1856)年 64歳  
『古今戯場話』草稿本を作成  
『正信傳説図会』三巻五冊を著述  
◆安政4(1857)年 65歳  
『貞婦賞賛 やまとこころ』を著述  
◆安政6(1859)年 67歳  
『孝養慈愛 柳巷の初花』著述  
『再撰花洛名勝図会東山之部』八巻八冊の稿本である  
『兼葭堂雜錄』五巻五冊編輯  
『晴翁漫筆』五巻五冊を制作  
◆万延元(1860)年 68歳  
・二世暁鐘成死す  
・10月頃、丹波福知山で百姓一揆に関係したかどで入牢、釈放後10日余りで急死  
◆文久元(1861)年 没後1年  
『殿川両岸一覽』四巻四冊刊行  
◆文久2(1862)年 没後2年  
『雲錦隨筆』四巻四冊刊行  
◆文久3(1863)年 没後3年  
『宇治川両岸一覽』二巻二冊

少女が荒ぶる川の神に生魚を神饌として捧げる頭屋神事だったと推測しています。鐘成の神話による解釈に至っては、荒唐無稽なものです。伝承古趣味的な見方にしたがって、日本紀の神話に由来する神事として解釈はこのようにして、時に少しずつ上書きされ創作していくものです。暁鐘成研究においては彼の記述を鵜呑みするのではなく、こういう視点に立つての文献批判が必要になつてくるとボクは思います。

浜松歌国という人物がいます。暁鐘成よりも二十三歳年長の歌舞伎作者、随筆家で、大坂に関する風俗などの考証随筆を残しています。その歌国と鐘成は、親しい間柄でした。歌国の著述には、文化十三(1816)年刊の『神社仏閣頤重宝記初篇』という寺社めぐりのガイドブックがありますが、鐘成はこの書の序文を書いており、その中で歌国について「友がきなる浜松のうし」と記しています。「うし」とは「大人」で、師匠、学者への敬称です。

幕末期の名所図会の作者として名を馳せた暁鐘成は、先行する出版物を博搜し、その内容を考証した上で、自らの著述に生かしています。その鐘成が、歌国の書を参考にしたと思しき記述が、鐘成の『摂津名所図会大成』にあります。

それは、西淀川区の野里住吉社で行われる「野里住吉一夜官女祭」についてのことでした。鐘成は同書で、これを「生け贋」を供える遺風だとします。ただ、それをさえどこかで達観しているところがある様子。すべてが「遊び」とはいっても余芸ではなく、亡くなり方で、表現に「本気」で楽しんでいる。

大阪の人にとって、彼が残した著作も重要ですが、それ以上に彼の生き方としても、店は天保の改革で潰されたり、経営不振でたたんだり、最後はよくわからないような亡くなり方をします。ただ、それをさえどこかで達観しているところがある様子。すこしが少し斜め方向からで、どこかクスクッと笑わせるところもある。

その生き方としても、店は天保の改革で潰されたり、経営不振でたたんだり、最後はよくわからないような亡くなり方をします。ただ、それをさえどこかで達観しているところがある様子。すこしが少し斜め方向からで、どこかクスクッと笑わせるところもある。

彼は多才で、さまざまなジャンルの本を出しています。江戸時代の大坂には、「知の巨人」と称される木村兼葭堂をはじめ数多くの「町人学者」の系譜がありました。それと同時に暁鐘成がいたわけです。彼は、町人学者というよりも、むしろ近代まで続く「趣味人」に近いような存在でしょう。実は、そういう人たちが文化のバックボーンを支えているのだと私は思っています。そのうえ暁成はクリエーターとも呼ぶべき人で、表現にもちよつとエスプリが効いている。「うがち」というのか、ものの見方が少し斜め方向からで、どこかクスクッと笑わせるところもある。

その生き方としても、店は天保の改革で潰されたり、経営不振でたたんだり、最後はよくわからないような亡くなり方をします。ただ、それをさえどこかで達観しているところがある様子。すこしが少し斜め方向からで、どこかクスクッと笑わせるところもある。

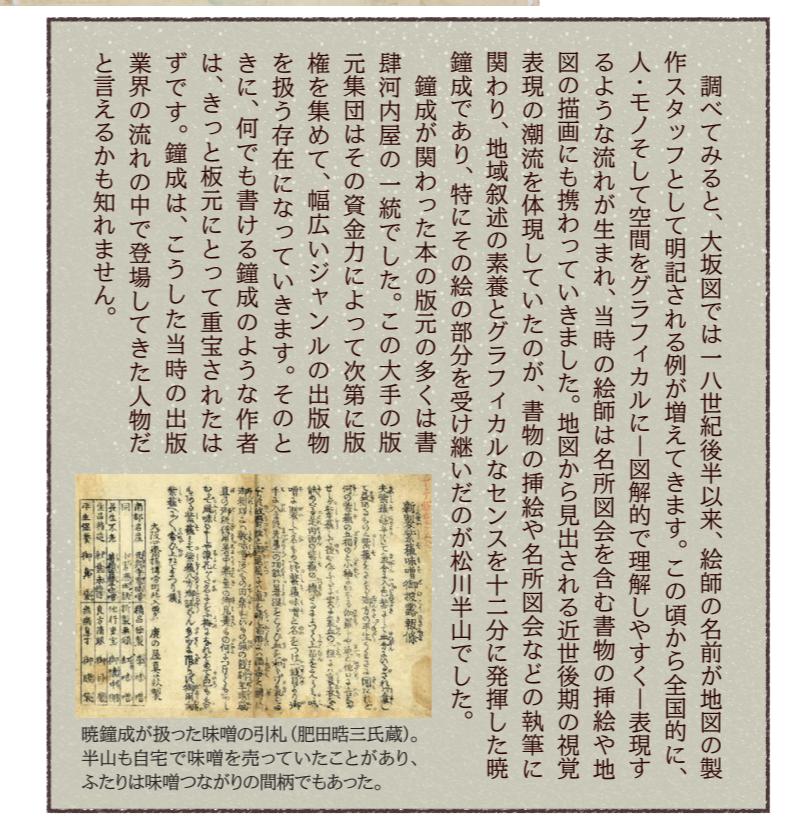
大阪の人にとって、彼が残した著作も重要ですが、それ以上に彼の生き方 자체が、現在につながるもののように思えます。暁鐘成といふ人物とその生き方を煮詰めていけば、きっと「大阪」の結晶が抽出できるのではないかという気がしています。



暁鐘成の「浪華名所独案内」(大阪市立図書館デジタルアーカイブ)では、天保山が目印山と表記されている。

### 【short interview】「暁鐘成」ってどんな人?

グラフィカルな地図が  
求められた時代の寵兒  
島本 多敬 氏 (立命館大学文学部 特任助教)

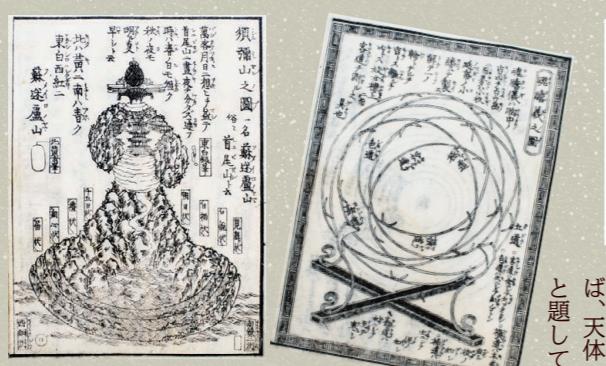


調べてみると、大坂図では一八世紀後半以来、絵師の名前が地図の製作者スタッフとして明記される例が増えてきます。この頃から全国的に、人・モノそして空間をグラフィカルに―図解的で理解しやすく表現するような流れが生まれ、当時の絵師は名所図会を含む書物の挿絵や地図の描画にも携わってきました。地図から見出される近世後期の視覚表現の潮流を体現していたのが、書物の挿絵や名所図会などの執筆であります。半山と鐘成は一緒に仕事をした間柄。特に、嘉永5(1852)年に鐘成が六十歳を迎えた頃からは本格的にタッグを組み、鐘成は作画を半山に任せ、自らは晴翁と号して文作に専念するようになります。ものが、人気の図だったようです。

「浪華名所独案内」と同時代の大坂の地図に「弘化改正大坂細見図」(弘化2~1845年)があり、その改訂版が「慶應改正大阪細見全圖完」(慶應元~1865年)ですが、そこには絵師として松川半山の名が記されています。半山と鐘成は一緒に仕事をした間柄。特に、嘉永5(1852)年に鐘成が六十歳を迎えた頃からは本格的にタッグを組み、鐘成は作画を半山に任せ、自らは晴翁と号して文作に専念するようになります。

若き暁鐘成の洒落っ気が全開した  
奇書『無飽三財図会(あかんさんざいずえ)』

徹底したパロディを支えるのは  
驚くべき知の厚さ



『無飽三財図会』(弘化3~1846年刊)の  
「須弥山之図」(個人蔵)。

『無飽三財図会』(弘化3~1846年刊)の  
「